

資料・3

雑誌『改造』版（一九二九）

雨の降る品川駅 中野重治

■■■記念に 李北満 金浩永におくる

辛よ さやうなら

金よ さやうなら

君らは雨の降る品川駅から乗車する

李よ さやうなら

もう一人の李よ さやうなら

君らは君らの父母の国に帰る

君らの国の河は寒い冬に凍る

君らの叛逆する心は別れの一瞬に凍る

海は雨に濡れて夕暮れのなかに

海鳴りの声を高める

鳩は雨に濡れて煙のなかを

車庫の屋根から舞ひ下りる

君らは雨に濡れて君らを■■■■

詩集掲載の普及版（一九七八）

雨の降る品川駅 中野重治

辛よ さようなら

金よ さようなら

君らは雨の降る品川駅から乗車する

李よ さようなら

もう一人の李よさようなら

君らは君らの父母の国に帰る

君らの国の川はさむい冬に凍る

君らの叛逆する心はわかれの一瞬に凍る

海は夕ぐれのなかに

海鳴りの声をたかめる

鳩は雨にぬれて

車庫の屋根からまいおりる

君らは雨にぬれて君らを追う



そして再び

海峡を躍りこえて舞ひ戻れ

神戸 名古屋を経て 東京に入り込み

■■■■■■■■■■に近づき

■■■■■■■■■■にあらはれ

■■■■■■■■■■

■■■■顎を突き上げて保ち

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

温もりある■■■■の歓喜のなかに泣き笑へ

さようなら

報復の歓喜に泣きわらう日まで

### 『中野重治全集』第九卷月報版（一九八〇年）

朝鮮語誌

『無産者』に掲載されたものを

水野直樹氏らが翻訳したもの

### 『梨の花通信』共同研究会版（二〇〇一年）

朝鮮語誌

『無産者』に掲載されたものを

再度翻訳しなおしたもの

## 雨の降る品川駅

中野重治

## 雨の降る品川駅

中野重治

御大典記念に 李北満 金浩永におくる

御大典記念に 李北満 金浩永におくる

辛よ さやうなら

金よ さやうなら

君らは雨の品川駅から乗車する

辛よ さやうなら

金よ さやうなら

君らは雨の品川駅から乗車する

李よ さやうなら

もう一人の李よ さやうなら

君らは 君らの父母の国に帰る

君らの国の河は 寒い冬に凍る

君らの反逆する心は 別れの一瞬に凍る

海は雨に濡れて 夕暮れのなかに

海鳴りの声を高める

鳩は雨に濡れて 煙の中を

車庫の屋根から舞ひ降りる

君らは雨に濡れて 君らを追い出す

日本の天皇を思ひだす

君らは雨に濡れて 彼の髪の毛 彼の狭い額

彼の眼鏡 彼の髭 彼の醜いせむしの背筋を思ひだす

降りしづく雨の中に 緑のシグナルは上がる

降りしづく雨の中に 君らの黒い瞳は燃える

雨は敷石に注ぎ暗い海面に落ちかかる

雨は君らの熱した若い額の上に消える

君らの黒い影は改札口をよぎる

君らの白いもすそは歩廊の闇にひるがえる

李よ さやうなら

もう一人の李よ さやうなら

君らは 君らの父母の国に帰る

君らの国の河は 寒い冬に凍る

君らの反逆する心は 別れの一瞬に凍る

海は雨に濡れて 夕暮れのなかに

海鳴りの声を高める

鳩は雨に濡れて 煙の中を

車庫の屋根から舞ひ降りる

君らは雨に濡れて 君らを追い出す

日本の天皇を思ひだす

君らは雨に濡れて 彼の髪の毛 彼の狭い額

彼の眼鏡 彼の髭 彼の醜いせむしの背筋を思ひだす

降りしづく雨の中に 緑のシグナルは上がる

降りしづく雨の中に 君らの黒い瞳は燃える

雨は敷石に注ぎ暗い海面に落ちかかる

雨は君らの熱した若い額の上に消える

君らの黒い影は改札口をよぎる

君らの白いもすそは歩廊の闇にひるがえる

シグナルは色を変へる  
君らは乗り込む

君らは出発する  
君らは去る

おお  
朝鮮の男であり女である君ら  
そのそこまでふてぶてしい仲間

日本プロレタリアートの前だて後だて  
行ってあの堅い 厚い なめらかな水を叩き割れ  
長く堰かれて居た水をしてほとばしらしめよ

そして再び  
海峡を躍りこえて舞ひ戻れ  
神戸 名古屋を経て 東京に入り込み  
彼の身边に近づき  
彼の面前にあらはれ  
彼を捕獲し  
彼の顎を突き上げて保ち

彼の胸元に刃物を突き刺し  
反り血を浴びて  
温もりある復讐の歓喜の中に泣き笑へ

シグナルは色を変へる  
君らは乗り込む

君らは出発する  
君らは去る

おお  
朝鮮の男であり女である君ら  
そのそこまでふてぶてしい仲間

日本プロレタリアートの前だて後だて  
行ってあの堅い 厚い なめらかな水を叩き割れ  
長く堰かれて居た水をしてほとばしらしめよ

そして再び  
海峡を躍りこえて舞ひ戻れ  
神戸 名古屋を経て 東京に入り込み  
彼の身边に近づき  
彼の面前にあらはれ  
彼を捕獲し  
彼の顎を突き上げて保ち

彼の首 正しくそこに 鎌先を突きつけ  
満身の奔る血に  
熱い復讐の歓喜の中で泣き笑へ

(最後の三行が変更)